

論文“Equilibrium Leadership in Tax Competition: The Role of Capital-Labor
Substitution/Complement”

(成城大学経済学部経済学科 菊池悠矢准教授、
名古屋大学大学院経済学研究科 玉井寿樹教授、
名古屋大学大学院経済学研究科/日本学術振興会特別研究員 王雅琪)

に対するコメント及びディスカッション

当該論文は、租税競争における政策決定のタイミングと、それに伴うリーダーシップの内生的決定に関して、理論的な新機軸を提示する意欲的な研究である。この論文では、資本と労働の技術関係（代替関係/補完関係）が、どの国が租税競争においてリーダーシップを取るかという戦略的決定にどのように影響するかを分析している。

理論モデルは、資本・労働・土地の3つの生産要素を含む生産関数と、人口規模の異なる2地域/国から構成されている。この枠組みにおいて、資本と労働が補完的な関係にある場合には、大国がリーダーシップを握りやすく、租税政策のリスク優位やパレート優位を獲得する可能性が高いとされる。一方で、両要素が代替的である場合には、小国が先手を取ることが戦略的に有利となる場面も示されている。こうした生産技術における補完関係や代替関係に基づく戦略的選択の差異は、政策決定のタイミングに関する先行研究には見られなかった重要な視座である。

さらに、労働市場の不完全性を組み込んだモデルの拡張により、より現実的な環境下での政策形成を丁寧に導いている。労働市場の外部性が複数均衡を生み出すこと、そしてその均衡がリーダーシップの帰属を大きく左右し得ることは、政策を設計する上でも上実務的にも有意義な示唆を与える。

当該論文は、租税競争におけるリーダーシップの決定要因に関して、資本と労働の技術的關係性が重要な役割を果たすことを示しており、既存文献への理論的貢献は極めて大きい。今後は財政移転や情報の非対称性といった他の制度的非対称性を考慮したさらなる拡張が期待される。これにより、租税競争の理論的理解が一層深化し、より精緻な国際政策の設計にも資することができよう。

名古屋大学大学院経済学研究科
教授 柳瀬 明彦